

## 歴史学と民俗学の間

原田 敏丸

近世の農村史料を求めて村々を歩いていると、自然に村々の民俗行事に出会うことになる。古文書史料に記述されていることはもとより鵜呑みにはできない。適切な史料批判を加えつつ事実を明らかにする必要があることは申すまでもない。民俗資料なかんづく村人の口頭で語られた伝承資料についても聞き取ったことを単純に客観的事実であるかの如く、民俗調査報告として活字にすることは大変危ういものを感じざるを得ない。従って民俗の聞取調査によつて客観性の高い事実を得るために守るべきいくつかの手続きが必要となる。その一つは同じ事柄について日を替え、人を替えて聞き取った上で、一致した説明を客観的

事実に近いものとして採用すべきであろうと考える。そしてその資料的根拠として聞取年月日と談話者のプライバシーを侵さない範囲で氏名を記録しなければならない。さらに民俗の視点で何らかの事実を捉えようとする場合、伝承だけではなく、具象的なものを拠り所にする必要がある。例えば建造物・石造物や竹木稲藁細工品などである。前者には神社や寺院の建物・石塔・墓石・記念碑など、後者には祭礼に用いられる諸物品・ヒモロギ・オハケ・行い行事の餅つき用具・注連縄などがある。これらの具象的なものには伝統が比較的残されているし、変遷も即物的に記憶に残されて判明しやすいからである。

昭和二〇年代の終り頃から四〇年代の前半にかけて滋賀大学に勤務して滋賀県の彦根に居住し、近江一国の近世史料の調査に大きな便宜を得ていた。当時は第二次大戦後における近世庶民史料の全国的な調査が始まって間もない頃で、今にして思えば地方の近世史料はほとんど所蔵者の手許に保存されたままの状態であったといつてよい。授業のかたわら県下全域にわたつてこれらの史料を訪ね歩き、保存状態を確認すると同時に、滋賀大学経済学部内に設置された史料館に保管の委託を要請し、所蔵者各位の賛同を得てかなりの成果をあげることができた。こうして収集した史料は学生はもとより、一般研究者の利用にも供したが、筆者もこれによって近世の農村社会経済史の研究に従事することができた。そこでの重要な関心事の一つが村共同体の問題であった。とくに琵琶湖北端の昭和三〇年当時長浜あたりから船を仕立てるか、もしも陸路なら途中小さな渡し舟を利用してやつとたどり着ける交通不便な伊香郡西浅井町大字菅浦すがのうらに豊富に残された中世から近世にわたる古文書を通じてこの問題を追究してみた（拙著『近世村落の経済と社会』山川出版社、一九八三年）。しかし古文書史料によって知り得る共同体の有り様やその変化は頗る限られ

ていて、共同体としての村の自治的機能はあまり史料の文面に姿を現さないことを知った。

近江の村々を歩いているうちに集落の入り口の道に張り渡された注連縄が目につくようになった。その後注意していると、この習俗は近江だけではなく伊賀・大和を加えた旧三か国に最も多く、現在でも行われている集落が多数あり、これらの地域では「カンジョウナワ」または「カンジョウツリ」と呼ばれている場合の多い事が分つてきた。その後現在までに知り得た限りでは、呼称はともかく類似の習俗は上記三か国について山城・若狭・丹後にそれぞれ数箇所ずつ、さらに伊勢・志摩・越前・但馬の諸国にも散見することが判明した。日本海沿岸地方では「ジャ」と呼ばれていることが多い。

これら村入り口の注連縄の持つ意味は何か。大多数の村々で伝えられていることは大別すると二つある。その一は五穀豊饒祈願であり、その二は村中安全祈願である。前者は村の年中行事には多くの場合に伴うもので、農業を主たる生業とする農村生活においては当然の村共同体としての願望といふべきであろう。村入り口の注連縄の持つ意味としては後者即ち村中安全の祈願が特に注目される。これ

は要するに村の平和な生活を脅かすようなもの——それは村人に仇をなす外敵であれ、病魔・悪魔であれ——が外から村の中に入ってこないようにという祈願である。これはまさに村の安全を村全体として守るという意識に根ざすものであるといえよう。文献的研究では明らかにしにくい村の共同体意識が生み出した象徴的な年中行事であるといえよう。

その一つの問題点と筆者が考えている点をあげておこう。村の出入り口をさえぎる注連縄は明らかに村の内と外とを区別し、その内側は村人の平和な暮らしが営まれる安全が守られた凡俗（日常）の世界であり、その外側は時に村人の安全を脅かす悪魔の住む世界であり、村人に仇をなす外敵の襲ってくる空間である。病魔もまた村人を襲ってくる災いであるという意味では悪魔や外敵と同じ範疇に属するものであり、これらをひっくるめて非凡俗（非日常）の世界と考えてよいかと思う。注連縄はまさにこの凡俗（日常）の世界と非凡俗（非日常）の世界を厳しく遮り、村人の平和で安全な生活を守る願い・祈りがこめられたものであった。また死後の世界も非日常であるから村人の墓地は原則として注連縄の外側にあり、村人の不幸は注連縄をめぐる

慣習と深いかわりがある。

ところで村の生活にとって非凡俗の世界は注連縄によって区別された村の外側だけではない。村の中にも注連縄によって区別された世界がある。氏神（鎮守）の社である。氏神の境内もまた注連縄によって凡俗（日常）の世界とは厳格に区別された神聖な世界であり、非凡俗（非日常）の世界である。こうして一般的には村の中央部またはそれに近いところに神聖な非凡俗の世界があり、その外側に平凡な凡俗の生活が営まれる空間があり、さらにその外側に注連縄によって区別された非凡俗の世界が広がっている。いわば三重の構造をなしているかのように見えるが、日常生活と非日常の世界とから成るといふ村落生活の二元性にかわりはない。最近村入り口の注連縄を見て歩いていく付くことは氏神の社が村のはずれに位置して村入り口の注連縄と至近距離にある場合がかなり多いという事実である。この場合はもしかすると上述のような三重の構造ではなくして、直接的に二元構造として把握することができているのではないかとこのことを想定している。この点はもう少し調査を重ねて近日中に論理的・実証的な把握を試みたいと考えている。

この村入り口の注連縄についてまず注目すべき点はこれまでに一〇〇例以上もみてきたが同じ形のもは一つもないということである。これは他村と自村は違う、いや違わなければならないという村を主体とする強烈な個性の表われではないかと考える。これに対して都市または都市的な影響が及んでいる地域においては正月に注連縄を張るのは集落の入り口ではなくて各戸の玄関前である。集落の入り口よりも家の入り口に重要性を認めている証拠である。集落の安全に加えて家の無事息災を大事と考える意識の発生が背景となっている。これはその社会の中で村落集団よりも家が個性をもつようになった表われであるといえよう。近世初中期における小農民の自立もこの事と関わりがあるのではなからうか。筆者が人間社会の発展過程に家の始原性を認めず、むしろ村落共同体から家族共同体へという基本的動向を設定する（拙稿「歴史における個の発展」本誌第三号、一九九九年）根拠は此処にもある。

このような村入り口の注連縄の在り様についてみると、村入り口が一箇所と考えられてそこに注連縄が張られている場合が最も多い。古くから開けたと思われる山付の村落はその典型である。集落の立地は種々様々であるが、

何らかの状況により村の裏側に向っては交通がほとんどなく、表の出入り口は一箇所と村人が考えている所ではその一箇所に注連縄が張られることになる。裏が山の場合に多いが、道が川に沿っている所では道とそれに沿った川の両方にまたがって張り渡される場合がある。このような事例は伊賀地方に典型的であり、また大和地方にもその形が多く見られる。

以上の一箇所の場合に対して複数箇所の場合がある。これは平地の場合に多く見られ、道が集落を貫通している場合は両方の出入り口二箇所ということになり、道が東西南北に貫通している場合は東西南北の出入り口四箇所ということになる。もっとも遠い過去はいざ知らず現在は複数箇所の場合、一箇所だけに注連縄を張り、その他の箇所は略式のを置くという形になっている場合が多い。いずれにしても村の出入り口を塞いで、村の平和な凡俗（日常）の生活を守るといふ感覚に変わりはない。

ところで筆者が勧請縄の調査を始めたのは昭和三〇年代であるから、かれこれ半世紀の間関心をもって観察してきたわけであるが、その間には旧来の形を厳守して今日に到っている場合があると同時に、縄の製法・材料・形態・寸

法や行事に変化が生じている場合も少なくない。その上この行事の趣旨さえも現在は漠然となつてゐる場合さえ見受けられるし、更にはこの半世紀の間に廃止されたところもある。このような変化の過程を現実に体験することによつて、文献史学では得られない人間の歴史を学ぶことができ、原型や変化の過程が忘却の彼方に消え去ることは人間の歴史の研究を志す者にとつては座して手をこまねてゐるわけにいかない問題である。そこで筆者が聞き取つた現行の行事の記録と撮影した写真——近年に変化したり、廃止された以前のものを含めて——を近いうちに印刷に付し後世に残したいと考えている。

また村の入り口を何らかの意味で重視する観念はひとり近畿地方を中心にしたわが国の中央地帯だけではなく、一般には「道切り」という名称によつて全国に分布してゐると思われる。これらの事例をもあわせて文献史学では明らかにし難い日本の村の共同体的性格について考えてみたい。またさらにこのような問題はひとり日本だけではなく、ユニヴァーサルなものとして議論できないかということを考えてゐる。その意味で韓国の古い集落の風習として伝えられてゐる天下大將軍・地下女將軍や東南アジアの山間部農

村で集落の入り口に縄を張るといふ習俗と比較してみたい。また遠くヨーロッパでは筆者が見聞した範圍でもミュンヘンのドイツ博物館 Deutsches Museum に陳列されてゐた多数の境界石 Grenz Stein やロマンチック街道沿いの集落の入り口に立てられていた大きなマリア像などは何らかの手がかりになりはしないかと思案してゐる。これらの分野については夫々の専門家の御教示を頂きたいものと願つてゐる。

(はらだ としまる・大阪大学名誉教授)